

【資料】

勧農社第三農場の運営

—明治二十七年十月「毎月日記簿」の紹介—

西 村 卓

一、解説

二、凡例

三、資料 「毎月日記簿」

四、添付資料①「勧農社第三農場金収入支出帳簿」集
計表②同農場「金領収証諸品種売払之分」一覽表③
「勧農社会計予算」

一、解説

(1) はじめに

明治三大老農の一人、林遠里が明治十六年に福岡県早良郡重留において設立した「勧農社」に関する研究の中で、江上利雄氏の「林遠里と勧農社」⁽¹⁾という論文が戦後の代表的研究であることは衆目の一致する所であろう。しかしこの論文の一つの問題は前述のように明治二十五年の同社拡張によってなされたもので

あり、社員名簿もこの時点で作成されたものとしてみてよい。⁽³⁾

また同氏が派遣実業教師への「厳格な統制」の例としてあげてある「派遣社員心得」もそれは明治三十一年作成のものであり、明治十八年から始まる全国各府県への実業教師の派遣は、当初はこの『心得』に示された「統制」よりはむしろ彼らの農業技術上の熟練度、即ち名実共に福岡県下での老農としての手腕に多くを負っていたと考えるべきである。⁽⁴⁾

要するに、勧農社の機構と運営について、勧農社設立（明治十六年）から同社拡張（同二十五年）までの時期と、その後の時期を明確に区分して論ずる事が必要であるという事である。

特にこの事は次の点からも重要な意味を持つ。即ち明治十年代後半から同二十年代前半における「稻作論争」を経て、塩水選種法の勝利、「寒水浸し法」「土匂い法」の「非科学性」が横井時敬らによって宣言される時期が明治二十四・二十五年である事から、勧農社の文字通り林遠里の私塾的位置から、結社として整然とした機構を持つ事になった明治二十五年の拡張が、林遠里稻作改良法の起死回生を企図したものとしてあつたからである。

しかしこの起死回生策も、一年はともかく、その後、効を

奏したとは言えない。後にみる勧農社予算からもわかるように、その収入の大部分を派遣実業教師からの維持金・借入金に負っていた事から、いわゆる「学理農法」の普及の速度が明治政府及び各府県による勧農政策の再転換の中で早まって行くのにともなって、その派遣数の減少による収入の行き詰りが顕在化し、さらに明治二十八年一月には紹介資料にみられるように、早くも第三農場を開墾する事になり、その衰退の歩を早める事になるのである。その意味からすると、勧農社の組織としての完成期が急速な衰退期の始まりと表現せざるを得ないのである。

（2）紹介資料について

今回紹介する資料は、『福岡県史』編纂事業の一環として飯沼二郎氏と共に林家を訪ねられた折に、同家より快よく閲覽複写が許されたものの一部である。これらの資料は従来その存在が知られていないかったものである。その内今回全文翻刻した資料は、明治二十五年の勧農社拡張時に怡士郡長糸村大字飯原に開設された第三農場の「日記」であり、それも明治二十七年十月から同二十八年一月という短期間に書き残されたものである。さらにその関連資料として、明治二十七年十一月二十九日以降の同場の「金収入支出仮簿」より作成した集計表及び同農場閉

鎮時（明治二十八年一月）に売り払った備品の領収証の一覧表「金領取証諸品械売扱之分」と、「勧農社会計予算書」を添付した。

「日記」は「明治武拾七歳十月吉祥日 每月日記簿 第三農場」と表記され、表紙共四二丁の野紙を綴じた冊子である。⁽⁶⁾ 每日の天気、さらに農場・夜業・雜記等がほぼ整然と項目立てて記述され、短期間とはいえ、同農場の運営が手にとるようにわかる。従来附設農場については、「農哲林遠里翁を憶ふ」で「廿五年勧農社の規模を拡張し、社内に九棟の建物を築き、農場を第一、第二、第三の三ヶ所に分ら、第一は本部とし畠畠に置き、作田十二町歩、第二は那珂郡（今の筑紫郡）田佐村五十川に作田八町歩、第三は怡上郡（今の糸島郡）長糸村飯原に作田三町歩にして、耕馬十頭、牛二頭、これに要する農具諸器械を購入し、盛んに社員養成に努めた。⁽⁸⁾」と記述されているに過ぎない。⁽⁹⁾ これら農場の具体的運営等について従来一切知られていないかった事から、明治二十五年拡張後の勧農社像を再構成して行く場合の必須の資料である事は言うまでもない。

また同「日記」は農事日誌としての意味も大きい。時期が十月から一月初旬までと限られており、一年というサイクルでの

農作業全般を見る事ができないが、稻作は収穫から脱穀調整、そして販売、裏作（麦・菜種作）は耕耘、播種、施肥等、夜業は収穫工作業等、またそれらの作業における男女の分業関係等まで詳細に記述されている。とくに耕耘が馬耕のみでなく、牛耕も少なからずみられる点は、従来の勧農社ハ馬耕といったイメージを修正するものであろう。

今後は同「日記」よりこの期間の農作業をより詳細に復元すると共に、勧農社の地元たる筑前西部（佐土・志摩・早良を中心として那珂・御笠を含めた諸郡）の当時の一般的農作業との比較研究が必要となろう。林遠里ハ勧農社の稻作改良法が、「寒水浸し法」「土埋い法」を核として乾田牛馬耕を含めた福岡地方での在来農法によって構成されているという従来からの指摘に対し、この研究によってそれに内実を与え得る事となる。

次に添付資料①とした「金収入支出仮簿」からの集計表は、前記「日記」では明確でない金銭の流れ（これはその通としての諸作物・農具・肥料等の流通を含む）の内容を映し出してくれる。

めており、これだけで六二%程である。他の収穫物としての大根・豆類、さらにスグリ藁等の販売も行なっているが、金額的には大きくない。一月十九日の「藁及び諸品穀壳立代」と同二十一日の「塙四斗二升」代は、同場閉鎖時の処分販売である。その他作男・作女及び農場助手等の賄代金が収入に計上されているが、これは支出の賄用諸品購入に充当されて行くものである。同場では畑も小作していたようで、その小作権の譲渡を飯原の波多江惣十に行なつた事がこれでわかる。

「支出の部」は、第三農場の生活史を語るとでも言うべき内容を含んでいる。日用品類、賄用食品類、農具・種子類、馬飼料としての大麦・麦粕等購入のための支出、「収入の部」で大きな部分を占めていた米売立代金の本社への上納、作男・作女及び助手・農場幹事への俸給等がわかる。

同「仮簿」では収支を差引した後、残金五円二一錢を社長林遠里が農場幹事鳥越猿吉より受け取り、みずから署名捺印している。

添付資料②は「金領收証諸品穀壳立代 明治廿八年一月
勸農社三農場」と表記された小横帳である。同農場閉鎖時に売払った諸備品の一覽表とも言ふもので、同農場がどのような備

品を所持して営まれていたか（特に農具の所有状況）がわかる点で興味深いものである。

次に添付した資料③は、「勸農社会計予算」と表記された表紙を含めて四丁程の小冊子である。「勸農社」と印刷された野紙が使用されている。同資料の作成年代は不明であるが、前述の時期区分に即して推察するに、役員として社長以下理事（副社長にあらず）、書記、農場幹事を置き、農場經營のための耕作掛、作女を雇用するという体制をとっている事から、明治二十五年拡張時以降に作成されたものと思われる。

この資料は、前記二資料と同様、江上利雄氏前掲論文執筆時には未発見のものであり、唯一勸農社の財政的姿（予算ではありますながら）を知らせてくれるものである。

江上氏はその姿を次のように推測されている。

「勸農社の経費の収入源が何であつたかはつまびらかでないが、派遣社員の納入金は、当初はともかく後にはかなり比重をもつていていたようと思われる。勸農社の収入源としては、このほか一般社員の社費、農場収入、名譽社員その他外部からの寄附金、遠里の講演謝金等が考えられる。塾生からの月謝も考えられるが、月謝をとつてはいたとしても、塾の性格か

ら推して恐らくは食費程度を出でなかつたのではあるまい。

或いは食費は労力提供と相殺であつたかも知れない。又外部からの支援は、磯野のような場合を除けば、設立当初乃至その後一、二年というのが一般であろう。遠里の講演謝金は個人的収入ではあるが、若干は勧農社の経費にあてられたかも知れない。しかし、いわれるようによが金錢に淡白で、県で貢つた金はその県で使つて余すところがなかつたとすれば、これは問題にならなくなる。そうだとすれば勧農社の経費はいきおい一般社員の納入する社費、農場収入及び派遣社員の納入金に依存せざるを得なくなる。農場からの収入がどのくらいあつたかは明らかでないが、遠里一家の生計と副社長、使用人（事務員・作男・作女）の給料を支払うだけの収入はその面積（三町歩）から推して到底考えられない。従つてその不足分と事務費その他の諸経費の大部分は社員の納入する社費や維持金に依存せざるを得なかつたであろう。一般社員の社費及び派遣社員の納入金がどの程度の金額に上つたかも明らかではないが、一般社員は勧農社を卒業しただけで自家に帰り、農業に従事したのであるから、一人当りの納入額はそろ多くはなかつたであろうし、卒業後一、二年はともかく

永続的に納入したかどうかは疑問である。人数が多いだけに全体としてはある程度の金額に上つたかも知れないが、遠里の直接指揮下にあつた派遣社員の納入金には及ばなかつたのではないかと思われる。派遣社員の納入金を振りに維持金・社費合せて月給額の五分とすれば一人一年六円強となり、聘用期間が一年に満たない者を考慮に入れても五円は下らないと思われる。それゆえ一人当たりの年間納入金の平均を五円としても派遣社員の納入金は五〇〇人の場合は二五〇円、八〇〇人の場合は四〇〇円となり、当時の米価を振りに一升一〇錢、今日の米価を振りに一〇〇円として今日の金額に換算すればそれぞれ二五万円、四〇万円となる。納入金の負担額が一割であつたとすればこの倍になる。それゆえ派遣社員の増加は勧農社の発達に連り、勧農社を發展せしめるにはこうした意味でも派遣教師の増加が必要であつたと思われる。⁽¹⁰⁾若干金額上での誤まつた推察及び不正確な記述がみられるが、ほぼその指摘は後述のように当を得たものである。

予算の内支出は一五三三円と見積られ、その中で役員及び耕作男女小使給料がほぼ五〇%を占めている。また諸費見積中、旅費が三〇〇円と四〇〇弱を占めている。この旅費の多くは各

府県への林遠里巡回用のものであつたと思われる⁽¹⁾。収入は教師七〇人からの維持金納入が一〇五〇円と四三%を占め、負債消却のための派遣教師からの借入金は七〇〇円で二九%を占める。これを合せると実に七二%程の収入が派遣教師からのものに負つてゐるという事がわかる。収入支出差引残高八九七円の内六五〇円は借入金の元利返済に宛られる事になっている。さらに未確定収入として名譽社員からの義捐金が見込まれているのである。

農場関係予算支出（農場幹事、耕作掛、作女、農具修覆料、肥料、馬飼料の合計）四五一円八〇錢と同予算収入（作徳米麦代金）五二〇円だけをみれば黒字の見積であるが、その差益は六八円二〇錢と他支出を到底補うものではない。江上利雄氏も推察しているように、勧農社運営（明治二十五年以降）は、収入中派遣教師からの維持金と借入金に大きく負っている事からみて、多数の実業教師の恒常的派遣に、その成否がかかっているのであり、この「予算書」はその事を明確に示してくれるのである。

明治二十五年以降、他府県への実業教師の派遣は「実業教手派遣人名一覽表」をみると、明治二十五年五九名、同二十

六年二名と急減して行く。但し、実業教師から林遠里に宛てた書簡は、明治二十六年以降も少なからずみられる事から、この数字を文字通りとする事はできない。しかしその減少は遠からずみられる事にはならない。

この「予算書」作成の時期が前述の推測通りならば、派遣実業教師数を七〇名として立てたこの予算は、明治二十年から同二十三年頃の派遣数のピーク時を想定したものである事から、現実性のないものと言わざるを得ないのである。

（1）農業発達古調食会編『日本農業発達史』第二巻（中央公論社、昭和二十九年）所収。

（2）同前 六三九頁。

（3）「名譽社員名簿」（林家文書所収）には加入年月日の記載がないが、同時に作成されたと思われる「特別社員名簿」（同前）「普通社員名簿」（同前）では、明治二十五年一月が最も早い加入年月日である事からも推察できる。

（4）林遠里が明治十九年に石川県の依頼により派遣する実業教師の選抜を行なうに当って、明確に勧農社員としての嚴格な教育を受けたもののみを選んだとは考えられない。遠里が県下の有力な老農を幅広く選抜しようとしていた事は、彼の手元に集められた各郡の老農の推薦状及び履歴書（林家文書所収）をみれば明らかである。そこには彼ら老農の地元での豊富な農事体験と改良法への関与が書き記されている。

(5) 『福岡県史』近代史料編「福岡農法」(福岡県、昭和六十二年)

所収「解説・解題」、拙稿「明治二十年における一老農の農事巡回」

(秀村選三先生御遺言記念論文集「西南地域の史的展開 近代編」

思文閣出版、一九八八年、所収) 参照。

(6) 第三農場関係資料として 他に「明治二十七年十月二十三日

諸日記 怡士郡長糸村大字飯原 効農社第三農場」の表書のある長

帳が残されている。これは同場助手谷飛佐吉によって書き残された

ものと思われ、紹介資料とほぼ時期を同じくするものであるが、記

述が紹介資料よりも一般的に簡素である事、また項目立も行なわれ

ていない事等から、今回は収録をみわせた。しかし同「日誌」は

紹介資料では不明な点、たとえば作女つるの筒井平七に対する「失

敗ノ言」についての事情が記載されている事から、今後紹介の機會

を持ちたい。

(7) 伊藤角一・越智信義著「篤農論」 篤農論会、昭和九年。

(8) 同前、一四頁。

(9) 江上利雄氏の場合も、この部分の地名の読みを修正し、若干の

加筆の上ほぼ同一内容の記述となっている(前掲書、六四二頁)

六四三頁)。

(10) 同前、六四五頁～六四六頁。

(11) 各府県へ派遣される実業教師の旅費は、派遣先の府県・郡等の負担となっている。

二、凡例

一、本資料は福岡市早良区重留林道生氏所蔵資料である。

一、「毎月日記簿」と「効農社会計予算」は体裁も含め全文翻刻したが、「効農社第三農場金収入支出仮簿」と「金領收証 諸品穀売払之分」は集計表及び一覽表にまとめて掲載した。

一、資料の翻刻にあたり、漢字は常用漢字を原則とした。異体、略体、俗字等も、以上に従った。

一、判読不能な文字は、その字数だけの□で示した。

一、抹消箇所は、抹消された文字には左傍に△を付し、訂正されている場合は、その右傍に訂正された文字を付した。

一、欄外の文字は△▽で囲んで、本文中適切な箇所に挿入した。

一、読みやすくするため、適宜に句点、読点、並列点を加えた。明らかな誤記はことわらず訂正した。

一、校注者のつけた註記にはすべて「」をつけた。

一、添付資料①の「支出の部」及び②の合計が原資料の合計

と異なるが、そのままとした。

三、資料「毎月日記簿」

表組

明治貳拾七歳十月吉祥日

十月六日 田採り、本区分
同 七日 有富兵七分田カリ半日、午後ヨリ種蒼
同 八日 ツミコエ造

十月六日 田採り、本区分
同 七日 有富兵七分田力造
同 八日 ツミヨエ造
同 九日 本区瀬戸田カリ

每月日記簿

第三農場

〔縱二四・五纏、橫一六・五纏〕

同十月六日
七日
病氣
浦志松次郎

病氣

同八日ツミコエ造り

同
九日 本区瀬戸分田カリ

十月六日 草切

西辰次郎

十月七日 午後ヨリ種取

十月六日 田カリ

同 九日 本区瀬戸分田カリ

同八日同

平
田野
千代

波多江
鶴

同 九日 同

夜業、女ハ稻扱キ、男ハムズデ作り。

旧九月八日ヨリ勤ムル

十月六日 田カリ

三・吉田住
・たふさ
・つさ

同 七日 同

同 八日 同

同 九日 同

明治廿七年十月十四日

天氣 晴天。

雜記 井手、那珂郡ヨリ五時頃倒着。

農場 役員皆休業、女三名ハ門口（久作分）ニ於テ三時頃迄稻

刈リ、夜業休業。

十月十五日

天氣 晴天。

雜記 浦志氏、帳簿引渡ノ談判、同氏三時ヨリ帰宅。

農場 西・筒井・林ハ、初瀬屋ヨリ風呂水ヲ本区寺ノ前ニ十二

時迄運ビノ事。ちよ・ふさ、久作分稻刈リ。

勸農社第三農場の運営（西村 卓）

十月十六日

天氣 晴天。

雜記 林氏ハ井手ノ依頼ニ依リ要用アリ。本社へ出頭、午後六時帰社。

農場 林代人ハ寺前ヘ牛耕、西氏ハ久作分ニ於テ稻縛、其他雜務。井手・筒井・女三名ハ、寺前ニ於テ稻扱キノ事。夜業、女ハ稻扱キ、男ハムズデ作り。

十月十七日

天氣 雨天。

来書

出社

農場

■西・筒井・井手・林・女二人、八時迄稻取寄之事。其ヨリ西氏ハ長野ヘ小麦粕取り出浮アリ。井手・筒井ハ雜務、女二名ハ稻扱ギ並ニ臼摺リ。波多江つる休業、林氏モ同シ。一同午後一時ヨリ休業。摺上ヶ高糲米二斗六升、

影米一升。夜業、皆休業。

同竹二十四本、源三郎ヨリ買来り。

廿七年十月十九日

区長御中　波多江壽・中原伊平ノ田ヲ以テス。

十月十八日

天氣 晴天。

農場 筒井・井手・ふさ・ちょ、字門口（屋敷下）並ニ久作

分・有富分稻刈り。西・林伊之吉、学校並ニ初瀬屋ノ人
糞ヲ掲ケ本区寺前へ運ブ、十二時迄。波多江つる病休。

夜業、女ハ稻扱キ、男ハ掃木其他雜務。

十月廿日

天氣 晴天。

農場 筒井・井手・林・女二名、久作分ニ於テ稻刈り、午後ヨ

リ屋敷ノ下及ヒ久作分ニ於テ稻縛ノ事。西辰次郎病休、
つる病休。女二名ハ夜業米付キノ事。夜業、男ハムズデ作
リ。

十月十九日

天氣 晴天。

出社 林伊之吉九時四十分出社、浦志氏午後六時出社。

農場 西・井手・筒井・林・ふさ・ちょ、午前大根手入、午後

稻場ノ下兼松分ニ稻刈り。（夜業、女ハ稻扱キ、男ハム
ズデ作り、井手ハ要用アリ。スデ作り、井手ハ要用アリ。）

來書 御区内ハ林遠里創立勸農社ヨリ試作セン田之内、從来ヨ

リ評刈シ来リシ候分有之候ハ、本年分其成積左記難形
ニ拠リ、本月廿日限リ御届出相成度、此段及御照会候也。

追テ右ニ係ル分無之シテ、社員ノ者ニシテ前条該當有
之候ハ、其分御届出ニ相成度申添候也。当役場○

十月廿一日

天氣 晴天。

十月廿一日

天氣 晴天。

農場 筒井・林、午前ハ塵小屋立テノ事。女二名ハ稻扱キ、午

後悉皆（兼松分）稻葉ノ下ニ於テ稻回シノ事。四時ヨリ
休業。浦志送別会ヘ臨席、井手ハ要用アリ他出セリ。西
ハ病休、波多江つる。夜業、皆休。

出社 山陪氏・谷氏、午後一時當農場視察之為メ出張。

農場 筒井・井手ハ午前廳小家立テ、一時迄雜務。女三名ハ稻夜業、女三名ハ稻
三名ハ稻
扱キ、筒井ハ草ス
西病休。

扱キ、午後一時ヨリ有富分ニ於テ稻縛ノ又其後稻扱キ。林伊之吉ハ二時頃迄本区寺前ニ於テ稻運ビノ事。

足ニ付、青木清介

ハムスデ
作リ、同
夕夜具不
足ニ付、青木清介
宅ミリ借
用セリ。

午後一時迄浦志・西両氏ノ帰社ヲ待ツコト門ニ寄ル
ノ伶ヘノ如クナレトモ、帰社セス。依而山陪氏ト両

氏ヲ問フ、石田ニ登リ西氏ニ逢ヒ、其儘帰社ス。浦志民モ帰社ス。其ミリ山陪氏・〔部〕谷・林交換ノ理由ヲ

「〔二〕之ヲ命令セラレタリ。林達誠ナク承諾ス。移リテ浦志ノ会計賄方諸帳簿計算取調ヘニ掛レリ。計算不完全ニシテ明朝ニ譲レリ。

十月廿三日 天氣 曇天。

農場 筒井・井手・谷・女三名ハ、午前(片中前)試験田ニ於

テ稻刈リ。西氏ハ本日浦志氏ト同行本社へ出頭スペキ儀有レトモ、病氣ニ依リ出頭セス。

午後ハ筒井ハ初穫茎雜湯ヲ稻場下(兼松分)ニ運ブ。外ハ川付(荒毛)ニ於テ稻刈リ。

男女共夜休業。

農場 筒井ハ午前ハ藁ヲスグリタリ。午後ハ稻運ビ(久作分)、

間ニ藁スグリ。女三名ハ稻扱ギ終日ナリ。山陪氏・谷・〔部〕浦志・西・井手ハ、昨日ノ帳簿取調ニ掛レリ。完全ナル帳簿モ無ク、会計賄方計算立兼ね、同氏モ恥色アル模様。

十月廿五日 天氣 曙天。午後五時ヨリ雨降リ、八時降止。

出社 林伊之吉、山陪氏ノ遺物取寄之為メ十時五十分出社、直

会計算計ヲ終ヘタル凡ソ五時ナリ。山陪氏、其ヨリ馬上

帰路ニ就ケリ。路中井手宅ニ立寄リシ頃、日ハ西山ニ没ス。終当夕一泊セラレ、農場ニ立返タリ。而シテ農場ノ

儀ニ付(肥料器械等其他)色々談判ヲ為シタリ。

林・浦志両氏ハ、午後六時頃荷物ヲ携ゲ帰宅セリ。西ハ

五時ヨリ帰宅。夜業女三名ハ稻扱キ、筒井ハ休。

十月廿四日 天氣 晴天。

農場 筒井・井手・谷・女三名ハ、午前(片中前)試験田ニ於

テ稻刈リ。西氏ハ本日浦志氏ト同行本社へ出頭スペキ儀有レトモ、病氣ニ依リ出頭セス。

午後ハ筒井ハ初穫茎雜湯ヲ稻場下(兼松分)ニ運ブ。外

ハ川付(荒毛)ニ於テ稻刈リ。

男女共夜休業。

農場 筒井ハ午前ハ藁ヲスグリタリ。午後ハ稻運ビ(久作分)、

間ニ藁スグリ。女三名ハ稻扱ギ終日ナリ。山陪氏・谷・〔部〕浦志・西・井手ハ、昨日ノ帳簿取調ニ掛レリ。完全ナル帳簿モ無ク、会計賄方計算立兼ね、同氏モ恥色アル模様。

十月廿五日 天氣 曙天。午後五時ヨリ雨降リ、八時降止。

出社 林伊之吉、山陪氏ノ遺物取寄之為メ十時五十分出社、直

二帰宅。

農場

筒井・井手・女三名外稻原みな雇入、午前ヨリ一時迄
（有富分）
久保分ニ於テ稻刈り。午後ハ屋敷之下及ヒ久作分ニ於
テ稻刈ヒ、間ニ稻扱ギ。谷氏ハ病氣ニ依リテ午前ヨリ大

荻浦醫師へ出浮、午後三時頃帰社。

夜業、女二名ハ米付キ、一名ハ稻扱キ。筒井ハ西ヲ問フ
 テ当宅ヘ至リトモ、会合セスシテ十時帰社。

十月廿六日

天氣 晴天。午後五時ヨリ曇リ、五十分ヨリ降雨、午後二時降
前

止。

出書 西辰次郎病休ニテ出社セサルニ付、代人トシテ人夫雇入

ノ相談並ニ秋半季日給金問合ノ事。林先生宛ノ書。

農場 筒井・井手、ちよ・ふさ・つる三名ハ、有富分屋根上

（青木分）、午後ハ川付荒毛（井上分）ニ於テ稻刈リ。

夜業女三名ハ稻扱キ、井手・筒井ハムスデ作リ。

農場

波多江つる、筒井平七氏ニ対シ失敬ノ言ヲ述ズ。依テ青
 木留吉氏モ立会ヲ乞ヒ、（谷・井手）つるヲ呼ビ、大体
 雇女ノ事並ニ居込ミ女區別ヲ論シ、以後之事ヲ訓諭シタ
 リ。

井手ハ、谷氏廿五日ヨリ病氣（ルイチヨ）ニ付キ、馬ニ
 乗セ本社迄送ラント事務ヲ終リ十一時將ニ立ントセシ時、
 折節西辰治郎氏帰社、其ヨリ西氏ト内心ヲ打チ分明ケ、氏
 ノ意ノ向フ処ヲ問ン為メニ、同氏ノ交際ナル兼松氏ノ許

ニ行キ、相解ケ談シ、其意ノ向フ処ヲ知リ、愈々明日旧
 日誌其他ヲ氏ヨリ受取り、其趣キヲ本社ニ語ルニ決シタ
 リ、時既ニ十一時ナリ。

筒井、門口（屋敷ノ下青木分）ノ試作ナル荒木種子取り、
 凡一斗ヲ得タリ。夜休業。

女ちよ・ふさ・つるハ、稻扱ギ。つる時々賄方ヲ兼ねタ
 リ。夜業稻扱キシタリ。青木ノ車貰ヒ、米麦各一斗ツ、
 付キタリ。

十月廿七日

天氣 曇天。

十月廿八日

天氣 午前晴天、午後曇天。

農場

井手ハ西君之記シタル日誌及其他帳簿一ツヲ持テ、六時頃ヨリ本社ヘ馬ヲ引キ出頭ス。

其要用之趣キ、女つる筒井氏失敬之事ヲ働キシニ付、之ヲ諭シ、同妻之心得善ラサルニ付、都合ニ依テハ引換之相談ヲ為シタリ。（一升升）（一合升）早良スキ一ツ・

肥桶子一荷・千把一ツヲ本社ヘ持行、三ツヲ持來タリ。山部氏ヨリ十錢ヲ受取り、女ヘ其帰路万寿五十ヲ与ヘタリ。又同氏ミリ女取締之儀ニ付手苛フ忠告アリタリ。愈

是非言不毛ヲ相談スルニ決シタリ。

西ハ浦志氏ト計算之為メ、井原迄^{〔迄〕}感キタリ。

筒井、藁積・厩肥出其他雜務、谷ムデ作り、女三名ハ稻扱キ、午後ハ筒井ト女三名ハ荒毛ニ稻刈リ、谷ハ大ギノ浦医師ヘ行タリ。

井手、大麦四斗一俵■其他前記ノ物品ヲ持參シ、午後十時帰社シタリ。夜業、女ハ前業ニ同シ稻扱キ、筒井ムスデ作り。

十月廿九日

天氣 曇天。

勸農社第三農場の運営（西村 卓）

井手・筒井・女三名ト谷（吉丸森太郎氏加勢ニシテ出社アリ）、何レモ午前荒毛ニ於テ田刈リ。午後片中前・荒

毛・有富分ニ於テ稻縛リ。夜業屋敷ノ下ノ（毛物荒木）

ヲ運入タリ。

山陪氏ヨリ依頼之越ヲ相談ヘリ。然レトモ、留吉氏理由ヲ述べ、此儀ヲ断ヘタリ。「儀之上、戸ヲ立テ女室ト男室トサキメルコトヲ決行シタリ。

○谷並西 夜業休。西ハ時價半算シ、病氣ニ依テ（スゴ）アミ

終日。

●同氏ハ午後ハ馬田行・牛田行等整ヒノ為メ經營。

十月三十日

天氣 午前曇天、午後晴天。

農場 井手・谷・女三名、片中前ニ於テ田扱キ終日。筒井穀運

ヒヲ為シタリ。西氏ハ病氣之為メ（スゴ）アミノ事。本

日糲扱ノ場ニ於テ、本区木晩^{〔晩〕}ミリヌキ一本買入タリ、代価六錢。

夜業 女ハ庭掲ゲ、井手・筒井・西ハ、ムスデ作り。谷休業ノ事。

十月三十日

天氣 晴天。

農場 西氏穀入所作、午後ハ役場小便汲ミ其雜務。

農場 井手・谷・女三名ト、外ニ西辰次郎氏病氣引入之為メ代人トシテ青木卯之吉妻・同留吉妻雇ヒ、何レモ稻扱キ。

西辰次郎・筒井ハ穀運ヒ。瀬戸田午前ニテ終リ、午後ハ

荒毛・有富分・屋敷ノ上ニ於テ稻縛ヒシタリ。

夜業 筒井・谷ハ（スゴ）タヽリ、井手ハ事務外雜務、西ハ休、

女三名ト青木留吉妻夜庭掲ケノ事。

十一月一日

天氣 晴天。

天氣 晴天。

出書 農場内婦人取締ノ事並ニ雇女十二月迄雇込ノ相談之書簡

ヲ發シタリ。

農場 女三名ト青木卯之吉妻・弟妻（但シ、西代人）ハ、〔ママ〕、

農場 谷・筒井ハ、役場・初瀬屋人尿糞、兼松分ニ運ブ。

井手・女三名ハ有富分ニ於テ稻扱キ。西ハ本日天皇陛下写真奉迎式ニ付、休業ノ事。

農場 午後休業シタリ。

荒毛ニ於テ稻扱キ、筒井・井手ハ穀運ヒ、西ハ稻寄セシタリ。

夜業 女悉皆稻扱之庭掲ケ、男ハ諸雜務。

十一月二日

此夜、浦志氏午後三時頃より一寸出社、夕景ヨリ西其他区壯年三四ヲ伴ヒ酒肴ヲ備エ、歌舞ヲ為シ、甚々農場ニ差支ニアルヲ以テ、西ヲ呼ヒ其以所ヲ聞キ、以後青木宅ニ於テ社ニ支ヘアル事ヲ為サル様相談スルニ決シタリ。

十一月四日

ヲ取ルノ筈ト答ヘタリ。夜業休業、イノコニ付。

天氣 午前晴天、午後ヨリ時雨。

農場 簡井ハ兼松分ヨリ藁運ビ、井手・谷・女三名ハ有富分ニ

於テ稻扱ギ。午後ハ荒毛ニ於テ藁積ミノ事。西ハ何レニ

カ出行シタリ。

夜業 井^{手底}・簡井・谷、スゴ作り。女ハ米麦付キ。青木清介方ヨ

リ米三斗借入タリ。

十一月五日

天氣 午前雨天、午後晴天。

出書 西・浦志、青木宅ニ於テ宴会ヲ開キ、甚^シタ農場ニ防害セ

ンヲ以テ、其事実ヲ照会^(シ脱)タリ。

農場 女三名ハ、午前糲形付ケ、午後ハ稻扱キ、傍ラ菜付ケン

タリ。井手・簡井・谷、午前ハ繩ヲナイ、午後ハ簡井・

谷、役場・初瀬屋肥掲ケ・雜水汲ミ。井手ハ長野ヘ裸麦

タ儀・小麦壳儀・田子口二斗四升、各代金壹円九十五

錢。青木留吉ヨリ小麦壳儀ヲ買ヒ、車屋ニ持行タリ。

早朝つるヲ西宅へ使ハシ、西ノ出社ヲ催ス。病氣ニ依リ

福岡病院へ出テ、帰路本社へ立寄リ、都合ニ因リテハ暇

勤農社第三農場の運営（西村 順）

十一月六日

天氣 晴天。

農場 谷、久作分ヨリ稻取寄セ。女三名稻扱キ。午後ハ休業シ

タリ。簡井ハ川上辰三郎氏葬祭ニ付休業シタリ。井手ハ

金十円借入タリ。夜業休業。

十一月七日

穀ハ有富分ニ於テ馬耕、井手ハ長野ヘ麥取り、代金ヲ払
武儀^{武儀}ヘリ。壹松庄七ヲ雇ヒ、臼ヲ作レリ。簡井ト女一名ハ其

手添ヲ為シ、女二名ハ稻扱キ。午後ハ簡井馬耕。

夜業 女三名ハ稻扱キ、男三名藁スグリ。

十一月八日

天氣 晴天。

農場 谷・井手ハ有富分ニ馬耕。簡井ハ午前稻入レ、午後肥料

上ケノ事。

裸麦三斗^(○賄方渡シ) 女三名ハ午前ハ稻扱キ、午後ハ塊打チ。

八升渡シ

夜業 有富分麦田上ケノ事。井手ハ要用アリ他出。

ヘラレタリ。井手同時ニ谷又六氏ト同道、本社ヘ出社シタリ。

○十一月九日

天氣 晴天。

谷ハ要用アリ。午前八時頃ヨリ帰宅セリ。筒井・井手・

女三名ハ、有富分ニ麦蒔ヲセリ。

夜業 女三名ハ麦突キノ事。

十一月十日

天氣 晴天。

農場 谷留守。筒井ハ定期会ヘ臨ミ十一時帰社。井手・女三名

ハ有富分ニ於テ麦田上ケノ事。林新助之望ニ依リ種子麦

四斗交換シタリ。受取之分四斗一升三合。

夜業 米摺リ、十時三十分。

四斗入五俵六升二合、影米五升七合、粉米一升壹合。

十一月十一日

天氣 晴天。

出社 谷又六氏、午前十二時出社アリ。山陪氏〔部〕ヨリノ言付ヲ伝

十一月十三日 天氣 晴天。

農場 井手・森下、兼松氏ノ肥重ヲ借り片中前ニ置キ、其ヨリ

森下ハ久作分ニ於テ馬耕ヲナシ、井手ハ株刈リ、傍ラ塊

農場 筒井交リテ麦蒔シタリ。夜業、女二名米付、此時十日摺渡シノ米壹斗六升二合貯方渡シ。波多江つる病休。

十一月十二日

天氣 晴天。

農場 筒井・女二名ハ有富分ニ麦種子〔覆カ〕弊ヒヲナシ、午後雜務、夜業ふさ休。

雜記 井手ハ本社ニ於テ相談ヲナン、助手森下、生徒日並・中村ヲ當時加勢ヲ受ケタリ。

谷氏導キテ二時帰社シタリ。井手ハ本社ヨリ帰路周船寺ニ巡リ、醤油粕約定ニ行ケリ。千四百斤注文シタリ。十時頃帰社シタリ。

ヒロヒ
打チ、初瀬屋雜水ヲ片中前日並ト遣ベリ。

ふさ・ちよ・つる・谷・中村ハ、荒毛ニ於テ稻扱キノ事。

夜業、女ふデ・ふさ・ちよハ糸毛打チ、井手・谷・森下

ハ久作分ニ塊打チ。

雜記

因ふでハ三時頃^{〔到〕}倒着シタリ。

日並ハ十二時^{〔到〕}倒着シタリ。其ヨリ塊打チ、つる本社^{〔越〕}

キ可キ旨ヲ論シタリ。

十日摺リノ米三斗、青木清介宅へ返済シタリ。

此夜柴田勝太郎氏鳩原サレシニ付、一寸農場へ出浮ンタリ。

ンギ切り。

雜記 つるハ老父ニ要用アリ、帰宅ス。

十一月十五日 天氣 晴天。

農場

馬耕、日並・中村一人鋤キ、一人ハ秧切り、久作分ニ終日。井手ハ瀬戸分ニ牛耕、四時半頃ヨリ雜務。キネノ用

木取り、二本分持參シタリ、其儕^{〔清介〕}氏ヘ依頼シタリ。

麦蒔

谷・ふで・ちよ、午前久作分ニ麦蒔。午後ハ稻扱キ(門口・屋敷ノ下・荒木)同夜業。

井手ハふさ舞屋ニ付、計算・夜具借用ノ分取行タリ。

上安一升四合 並安一升二合
夜業上四合、並三合

夜業ノ分十十四錢八厘三
居間十一錢五厘三毫六

十一月十四日 天氣 晴天。
夜業三錢二厘九毫六

農場 谷氏ハ瀬戸分ニ牛耕、日並久作分ニ馬耕、ちよハ賄雜務、

間ニふでト塊打チ並ニ田上ケ。井手・森下、午前馬屋肥

出シ、井手ハ間ニ生徒教導ニ十一時ヨリ十二時迄、午後

ハ田上ケ、森下瀬戸分ニ馬耕、中村ハ谷ト瀬戸分ニ行ケ

リ、二時頃ヨリ田上ケ。

ふれ・ちよ麦蒔、井手・谷・森下ハ久作分ニ田上並ニガ

夜業^{〔でカ〕}、井手・谷・森下ハ久作分ニ田上並ニガ

勵農社第三農場の運営(西村 駿)

受ヶタリ。

右ハ米四俵完リ、其内ヲ受取タルナリ。ふさ給料渡済ミノ事。森下ハ学校・役場肥料上ケ。午後皆稻扱キ庭掲ケ終リ、四時半ヨリ休業。依テ雞一斤七合五、ヲイ労シタリ。波多江つる、本社ヘ出社シタリ。

米貳升、三月廿七日

夜業 白搗リ、日並・中村、片中前馬耕。

二番ガイ □米三升二合

影米八升

現米三石一斗

十二時壯年其他西・浦志・榎等出社。西等ノ咄ニ極リ、警察三行ケリ。井手ハ他出。

十一月十七日 天氣 晴天。

農場 谷ハ片中ノ前ニ牛耕。日並秣切り、中村休業、井手・森下・ふで(ちょハ賄ニ十時迄)、其ヨリ瀬戸分ニ小麦蒔キ。

夜業 井手・谷・森下繩ナイ、女米付キ。

渡し方 米壺斗 十一月十日摺リノ内

十一月十九日 天氣 晴天、四時半頃ヨリ降雨。

農場 簡井・森下・ちょ・ふで、久作分麦時。三時ヨリ片中前薙積ミ。女ハ雜務。

谷・日並休業。

夜業 休業ノ事。

中村本社ヘ帰ル。

十一月十八日 天氣 晴天。

農場 渡し方

井手・ちょ・ふで・森下、瀬戸分ニ麦蒔、午後一時迄。谷一時半迄休業。

午後ハ谷・森下、片中分薙積ミ、井手ハ長のヘ小麦粕取り(一俵小麦粉一俵分)ニ行キタリ。

十一月廿日 天氣 雨天。

農場 簡井・森下・ふで、繩ナイ。谷フゴ作り。午後休業、日

並休業、ちょ休ミ。

夜業 簡井・森下、繩ナイ。ふで同ク。谷・日並休業。

十一月廿一日 天氣 八時頃ヨリ白日。

農場 谷・筒井、午前休業。午後久作分ニ馬耕。日並休業。
〔賄方渡シ〕森下・ふで・ちよ休業。日並・森下肥運ヒノ事。

米三斗 夜業、繩ナイ、女米付キノ事。

天氣 曇天。

農場 井手・谷、屋敷之下ニ馬耕。午後井手ハ醤油粕受取、壺

一千四百三十式斤、内六十式斤風体、真壺千三百六十四斤。

午後三時頃迄谷三時迄馬耕。筒井午前口引キ、ちよ・ふ

で終リ田上ヶ、麦蒔キ事。

十一月廿二日

天氣 曇天。

農場 谷馬耕、筒井・ふで・ちよ、田上ヶ。井手・森下ハ朝肥

揚ケ、午真ヨリ田上ヶノ事、久作分ニ。

夜業休業。

十一月廿三日

天氣 午前曇天、午後降雨。

農場 筒井・谷・ふで・ちよハ、午前久作分ニ麦蒔、四時迄。

後ハラズ作リ。夜業休業。

農場 小麦播、午前谷・筒井・女二人。

同 同 后谷・女二人。

私用他出 午后筒井。

夜業、団子粉搗、女二人。

十一月廿六日 晴天。

天氣 晴天。

農場 馬耕字片山崎、后三時迄、谷。

地整及小麦播片山崎、女二人。后三時ヨリ谷、○正午迄

十一月廿四日

勧農社第三農場の運営（西村 卓）

筒井。

馬繕ヒ、后筒井。

夜業、^麦米搗、女二人。

十一月廿七日 雨天。

天氣

農場 肥汲ミ取寄セ 学校外二ヶ所 正午迄、筒井外二名。繩ナイ

正午ヨリ筒井・女二人。夜業、繩ナイ、右三人。

本社行 率キ行 同夜泊ス、谷。

△雜記 古藤、三農場へ出張ノ処、本日五時着。夫ヨリ帰宅ス。

山岡、馬耕研究ノ為メ、古藤同道、后五時着。▽

十一月廿八日

天氣 疊天。

農場 繩ナイ終日、筒井・女二人。

雜記 谷ハ本社ヨリ私用ニテ帰宅。

山岡休。○古藤帰宅ノ処、后六時帰社ス。

農場 夜業、麦搗、女二人。

十一月廿九日

天氣 午后曇天ニシテ時々雨降ル。

農場 繩ナイ終日、^{午前}古藤・筒井・女、^{午後}山岡、

雜記 病休フデ。

十一月卅日

天氣 曇天。

農場 助手出社 古藤・筒井、午前十時ヨリ谷、正午ヨリ鳥越。

雇人出社 フデ・チヨ。

生徒出社 山岡。

雜記 谷廿七日ヨリ本社行ノ処、蒲團式枚ヲ買求ノ分ヲ持チ、

昨夜志摩郡潤ヘ雨天且ツ日暮ノ為一泊シ、前十時帰ル。

同 鳥越、正午着ス。夫ヨリ詣簿編立。

農場 繩ナイ、古藤・筒井・山岡・女二人。前十時ヨリ谷。

夜業、米搗、女二人。

賄、チヨ。

十二月一日 土曜。

天氣 晴天。

出社

鳥越・古藤・谷・筒井・山岡・フデ・チヨ。

雜記

鳥越午前七時ヨリ大麦種子購入ノ為メ東村地方へ行カン

シテ、其代金造リノ為メ、本村西原熊吉迄米壳俵ヲ荷

車ニテ行、熊吉不在故米ハ預ケ代金ハ受取ラズ。大麦種

八本村波呂利右エ門ニ頬ミ持□ズ。前九時帰ル。

馬耕川付田牛一頭ニテ鋤ク、筒井。

醤油糟水肥ニ投ズ。前十時中ノ前古藤畔豆引及ビ藁

片付字川付ニ前十一時迄、フデ。

小麦播片山岡ニ前八時ヨリ、チヨ。九時ヨリ鳥越。

○古藤及ビテ前仕事終テ□

賄、チヨ。○前十一時ヨリ古藤小麦播ニ加ル。同所午后三時終テ播終ル。夫ヨリ一同山岡共ニ字川付田地整ヲ為ス。

本日旧十一月午ノ日故、慰労トシ糯米武升五合ヲ農場員中ニ渡ス。

十二月一日 日曜。

天氣 午前雨、后曇天。

出社

鳥越・古藤・谷・筒井・山岡・フデ・チヨ。

飼農社第三農場の運営（西村 順）

雜記

筒井午后三時ヨリ大字本区ニ火災ノ模様ニテ行、后六時帰ル。同船寺醤油屋ヨリ一人ヲ立テ醤油粕ノ代金催促ニ

同 午后六時来ル。然ルニ金子欠乏ニ付、本月十日迄延期ノ手紙ヲ使人ニ托ス。

農場 粉磨リ、鳥越・古藤・谷・女二人。

同 俵ゴシラエ、筒井午后三時迄。

夜業、米サビ及ビ俵ゴシラエ筒井・古藤

本日穀搗高、万作坊主拾八俵壹斗八升ト影米五升ヲ搗リ得タリ。

農場 粉磨リ、鳥越・古藤・谷・女二人。

同 俵ゴシラエ、筒井・古藤

本日穀搗高、万作坊主拾八俵壹斗八升ト影米五升ヲ搗リ得タリ。

醤油粕釀及ビ本区迄大麦種求メニ行、前十一時迄。貯、
貯、チヨ。

チヨ。

夜業米俵イ、十八俵、女二人。
〔ママ〕
男四人。

十二月四日 火曜。

天氣 晴天。

役員
助手 出社 鳥越・古藤・谷・筒井。

助勢人出社 波多江善次・中原伊平・中島鶴太郎・池園菊太郎

・青木清太郎・重松正七・筒井安太郎・井上初太
郎・古川虎吉・古川桃太郎。

雇人出社 フデ・チヨ。

雜記 麦蒔季節遅レニ付、助勢人右十人アリタリ。

重松正七方ヨリ午后牛一頭ヲ借リタリ。

農場 牛耕、門ノ前終日馬一頭ニテ、筒井。
片中ノ前正后迄、谷。○午后門ノ前

借牛ニテ、青木清太郎。
社牛ニテ、谷。

十二月六日 木曜。

天氣 晴天。

麦蒔川付及ビ鳥越・フデ、前八時ヨリ波多江・中原・中島・
片中ノ前 古川・古川・青木・重松○前九時ヨリ筒井安・井上・
右積肥運、古藤荷車一輛ニテ○右時付午后五時終ル。

門ノ前地整、午后五時ヨリ右麦蒔總人數。

十二月五日 水曜。

天氣 晴天。

出社 鳥越・古藤・谷・筒井・フデ・チヨ。

雜記 古藤、夜郷里へ帰ル。但シ、鋤取り。

農場 学校外二ヶ所肥汲及ビ肥桶据直肥桶ハ荒毛ニ移ス、右前
時迄古藤・谷。

大麦播及ビ地捲ヘ門ノ前、鳥越・筒井・チヨ・フデ・前
十時ヨリ古藤。

谷○鳥越ハ正午ヨリ午后四時迄欠。

牛耕、門ノ前、正午ヨリ后四時迄、鳥越。
共
貯・麦播間ニ、チヨ。

十二月六日 木曜。

天氣 晴天。

出社 鳥越・古藤・谷・筒井・フデ・チヨ・西助勢
雜記 西辰次郎、前八時ヨリ助勢ニ来ル。日並・本図研究并ニ助
勢ニ来ル。午后四時着場。

農場 田耕馬耕字瀬戸筒井

(音脱カ)

農場 田耕牛耕門口午后老時迄、谷・日並・本図。

大麦播、瀬戸口午后二時半迄、鳥越・古藤・筒井・女二人。

大麦播、瀬戸口、前九時迄、古藤・谷・フデ・チヨ、前十時ヨリ、前九時ヨリ、古藤・谷・フデ・チヨ・西。

賄并ニ麦播ニ加ハル、チヨ。

右終テ生徒ヲ除クノ外儀捲ヘ及ビ雜務。

人。

賄、チヨ。

十二月七日 金曜。

天氣 晴天。

出社 鳥越・古藤・谷・筒井・日並・本図・フデ・チヨ。

雜記 [記載なし]

農場 田新字瀬戸口午後牛耕后二時迄、本図。

大麦播字瀬戸口、鳥越・筒井・フデ・チヨ前十一時ヨリ、古藤・日並、后

田耕終ヨリ、本図。

積肥出荷車牽輪ニテ正午迄、古藤・谷。

賄并ニ麦播ニ加ハル、チヨ。

八十二月八日▽十二月八日 行土曜。

天氣 曇天、正午ヨリ雨降ル。

出社 鳥越・古藤・谷・筒井・日並・本図・フデ・チヨ。

雜記 田中和三郎、本社ヨリ帰宅ノ途ニ過ル、一泊ス。

勸農社第三農場の運営(西村 順)

十二月九日 日曜。

天氣 雨天。

出社 鳥越・古藤・谷・筒井・日並・本図・フデ・チヨ。

雜記 日並・本図休耕。

農場 今夜ヨリ納屋宿直ヲ始ム。

穀・筒井・日並・本図・フデ・チヨニテ万作坊主拾九

俵式升、五合ヲ摺り得タリ。

俵捲ヘ、谷。

賄、チヨ。

納屋宿直、筒井。

十二月十日 月曜。

天氣 雨天。

出社 古藤・日並・本岡・チヨ・フデ・田中。

雑記 日並・本岡、午前休暇、田中正午迄休。鳥越・谷・筒井、農談会行。

農場 中結ヒ、繩ナイ、古藤午前丈。終日フデ・チヨ。

出社 儂捨ハ、古藤・日並・本岡・田中午后。

賄、チヨ。

納屋宿直、古藤。

十二月十一日 火曜日。

天氣 雨天。

出社 鳥越・古藤・谷・筒井・チヨ。

雑記 鳥越・谷・筒井、農談会出席ノ処同夜一泊、鳥越ハ午后

一時帰場シ、谷・筒井ハ前十一時帰ル。日並・本岡、本

日午后三時ヨリ本社へ帰ル。

農場 繩ナイ、古藤・女二人、前十一時ヨリ谷・筒井。

鳥越ハ后

鳥越ハ小作米・掃除米取調ノ儀ニ付、午后一時ヨリ本区
田中秀次郎ハ、八反田初瀬屋○飯原重松德蔵、古川儀平

宅二行。

十二月十二日 水曜日。

天氣 雨天。

出社 鳥越・古藤・谷・チヨ、青木卯之吉妻。

雑記 筒井・フデ病休、筒井ハ午后一時ヨリ帰宅。本日米拾俵
ヲ売ル約定ニテ前金収入。

農場 粗搗白毛小綿坊主、鳥越・谷・古藤・チヨ、正午ヨリ青木卯之

吉妻。

右摺立米「記載なし」。

納屋宿直、古藤。

十二月十三日 木曜日。

天氣 曇天。

出社 鳥越・古藤・谷・半病休・チヨ。

雑記 筒井帰宅、チヨハ正午ヨリ帰宅ス。壳米拾俵ヲ出ス。
チヨハ都合ニ拋リ一泊ノ処ニテ帰宅○本区。

農場 肥沃、学校及ビ初瀬屋、午前九時迄古藤・谷・チヨ、后

四時ヨリ古藤・谷。

俵持ヘ、鳥越。

小作米斗牛二頭ニテ前九時ヨリ古藤・谷。

夜業■俵持、鳥越・古藤□・フデ。本区迄肥桶ノ破

談井ニ醤油取り。賄、前チヨ、后フデ。

△夜業、俵持、鳥越・古藤・フデ。▽

△同、本区水田角次方ニ肥桶ノ破談行、谷。▽

△賄、前チヨ、
后フデ。▽

△納屋宿直、谷。▽

十二月十四日 金曜。

天氣
雨天。

出社 鳥越・古藤・谷・筒井 ■フデ。

雜記 筒井・チヨ帰宅ノ処、筒井ハ后三時半帰ル。チヨハ后六

時帰ル。○牛買人来ル故ニ、男三人共協議ス〇

農場 粿磨、古藤・谷・鳥越・フデ、午后三時五十分迄。

午后四時ヨリ牛売談判、男四人。△代金廿一円五十錢ニ

テ約定ス。▽

賄、フデ。

約農社第三農場の運営（西村　卓）

本日摺立米ハ、サビズシテ庭ニ納ル。

納屋宿直、古藤。

十二月十五日 土曜。

天氣
雨天、寒風ニシテ雪降ル。

出社 鳥越・古藤・筒井・谷・フデ・チヨ。

雜記 社長ヘ牛売及ビ農場ノ景況況況ニ付、報知書ヲ出ス。牛賣生

牛受取ラ願フ故ニ、都合ニ挽り牛ヲ渡ス。前九時迄、鳥

越ヘ庶務整理。

農場 粿磨リ、古藤・谷・フデ・チヨ。午前筒井、前九時ヨリ
鳥越。

右摺立米ハ、サビズシテ庭ニ納ル。

筒井、后俵ノ口取り。

賄、チヨ。

納屋宿直、谷。

十二月十六日 晴天 日曜。

天氣 晴天。

出社 鳥越・古藤・谷・筒井・フデ・チヨ。

雜記

〔記載なし〕

賄、チヨ。

農場

米サビ及ビ俵持、古藤・谷・筒井、后三時迄。
フデ・チヨ、前十一迄。

〔以下折り込み〕
「薪七ハエ之金、一ハエ四十五錢

代三円九十九毫錢五厘」

大根引、前十一時ヨリ、古藤・谷・筒井。

后三時ヨリ、古藤・谷・筒井。

小作米納、馬老頭ニテ有富兵七及ビ古川儀平・兼松齋根

方ヘ、鳥越。

内老田式拾五錢渡済、有留條太郎。

夜業、俵シメ、男四人。

同毛ムシリ、女二人。及ビ青木留吉助勢ス。

米四俵代、拾円四十錢分、都合ニ拵リ拾円五十錢渡ス。受取
人浦志松次郎。」

賄、チヨ。

十二月十七日 月曜。

天氣 雨天。

出社 鳥越・古藤・谷・筒井・フデ・チヨ。

雜記 鳥越、夜ハ私用ニテ他出、后十一時帰ル。

農場 粿磨リ、鳥越・古藤・筒井・フデ・チヨ。

右摺立米拾八俵武斗三升九合、影粉米共六升六合。
武

俵アミ午前、俵口ク、リ后、谷。

夜業、俵ヘ米斗込ミ、口取り中ズ、古藤・谷・筒井・フ
デ。

農場 俵メ午前、谷・鳥越。

小作米納、馬老頭ニテ有富兵七方ヘ、筒井上文夫

大根榆ヘ、前古藤・フデ・チヨ。

肥汲ミ、学校・役場后古藤、午后三時ヨリフデ。

米持へ、正午ヨリフデ・チヨ、后三時〔ノ三時迄〕
賄、チヨ。

水肥施、片山崎小麦へ、后筒井・谷。

終テ浴水出シ及八反田ヨリ醤油粕取寄セ。

十二月十九日 水曜。

天氣 雨天。

出社 鳥越・谷・筒井・フデ・チヨ。

雜記 古藤帰宅、岡山帰宅、農場一同午后休暇。但シ、連日ノ

疲レアルニ依テナリ。

農場 俵持へ午前、筒井・谷・鳥越。

籠ナイ、午前フデ・チヨ。

賄、チヨ。

十二月廿日 木曜。

天氣 晴天。

出社 谷・筒井・鳥越・フデ・チヨ。

雜記 古藤・岡山帰宅。

農場 小作米納、十一時迄馬鹿頭ニテ有畠兵七宅迄、筒井。午

後一時半迄、車老輔ニテ瀬戸福井方迄、谷・鳥越。

雜務、前十一時ヨリ午后二時迄、筒井。

勸農社第三農場の運営（西村 卓）

十二月廿一日 金曜。

天氣 晴天。

出社 谷・筒井・鳥越・フデ・チヨ、午后四時四十分岡山、同

五時古藤。

雜記 古藤・岡山帰宅ノ処、午后五時帰ル。

農場 粗磨リ、正午迄鳥越・フデ・チヨ。

前日分共摺立米八俵三斗三升六合。

水肥施、片中前正午迄、谷・筒井。

門口畑馬耕、午后筒井、終テ同所田ヲ鋤ク。

同所辛子植、午后鳥越・谷・女二人。

夜業、男五人・女武人、米サビ及ビ俵持ヘ。

賄、チヨ。

農場 本区分へ肥汲ミ及ビ水肥施、片中前及び荒毛ヘ、古藤・岡山。

十二月廿二日 土曜。

天氣 曇天、晴天。

出社 鳥越・古藤・谷・筒井・岡山・柴田・フデ・チヨ。

雜記 柴田、午前八時助勢ニ来ル。

農場 水肥施、字荒毛ヨリ瀬戸分ヘ、午前古藤・筒井・岡山。

馬耕、字荒毛、午前馬一頭ニテ谷。

辛子植、地整ヨリ午前字門口、后荒毛、鳥越・柴田・女

二人、后谷。

積肥運、荷車老輔ニテ瀬戸分ヘ、后古藤・岡山。

長野行及ビ馬検査行、并ニ本区分田へ醤油粕運ビ、谷

・筒井。

賄、チヨ。

十二月廿三日 曰曜。

天氣 曇天。

出社 鳥越・古藤・筒井・岡山・柴田・フデ・チヨ。

雜記 谷、私用ニテ帰宅。鳥越、夜社用ニテ他出。柴田、夜私

用ニテ帰宅。

農場 本区分へ肥汲ミ及ビ水肥施、片中前及び荒毛ヘ、古藤・

岡山。

積肥運ビ、片中ノ前及ビ字川付ヘ馬巻頭ニテ、筒井。

同肥切り出し、チヨ。

同片中前及ビ川付ヘ荷車ニテ肥運ヒ及ビ施、鳥越・フデ

・柴田。

夜業、繩ナイ及ビ俵持ヘ、古藤・筒井・岡山。米搗、フ

デ・チヨ。

賄、チヨ。

十二月廿四日 月曜。

天氣 雨天。

出社 鳥越・古藤・筒井・岡山・フデ・チヨ。

雜記 谷・柴田、帰宅。

農場 翠廢、万作坊主曰武挺ニテ、鳥越・古藤・筒井・岡山

・フデ・チヨ。

右摺立高、武拾武俵九升六合、影米・粉米共七升。

夜業、俵持及ビ米斗リ、右六人。

賄、チヨ。

農場 犁肥出、午前古藤・筒井。

馬耕、前九時ヨリ門口へ正午迄、鳥越。

肥汲ミ及ビ積肥施、辛子苗起シ、正午迄、岡山・フデ。

雜務、正午迄、チヨ。

十二月廿五日 火曜。
天氣 晴天。
出社 古藤・岡山・フデ・チヨ。
雜記 鳥越・筒井、試験ニ付本社行。午前一時帰ル。谷・柴田
帰宅。
○本日米拾三俵壳リ、代金武拾八円六十四錢受取、但シ、
前金五円収入ノ残。

農場 備播、正午迄、古藤・岡山。

豆打落、午後女一人。

豆打落、正午ヨリ女二人・鳥越。

農場 夜業、備播、古藤・筒井・岡山。豆播、女二人。賄、チ
三。

十二月廿六日 水曜。
天氣 晴天。
出社 古藤・筒井・岡山・フデ・チヨ。
雜記 谷・柴田帰宅。鳥越、前九時迄私用ニテ他出。前九時ヨ
リ同十時迄、役場へ肥料米ノ事ニ行。○同十時ヨリ十一
時半迄、浦志・西来社ニ付談判。
農場 廉立及ビ打落シ、古藤・岡山・筒井・女二人。
鳥越、前十一時三十分ヨリ右ニ加ハル。

十二月廿六日 水曜。
天氣 晴天。
出社 古藤・筒井・岡山・フデ・チヨ。
雜記 谷・岡山・柴田、帰宅。鳥越、夜社用ニテ他出。

勸農社第三農場の運営（西村 順）

二九（一六四）

賄、チヨ。

后八時ナリ。▽

農場 俵拵ヘ及ビ肥料米渡シ、谷・筒井・鳥越。

拾種心持・粋拵及ビ摺立、女二人。

夜業、俵拵、筒井・谷。米搗、女二人。

十二月廿八日 金曜。

天氣 曇天、寒風有り。

出社 鳥越・古藤・筒井・フデ・チヨ、午后三時ヨリ谷。

雜記 谷帰宅ノ処、午后三時帰ル。

農場 粟磨リ及塵カス立及ビ打落シ、鳥越・古藤・筒井・フデ

・チヨ。

右粟磨リハ、夜十一時迄ニテ。

摺立米ハ塵米六石八斗三升壹升九合 影米六升壹合
壹升

摺立米ハ塵米六石八斗三升壹升九合 同米六升壹合

俵拵、午后三時ヨリ、谷夜業迄。

賄、チヨ。

十二月廿九日 土曜。

天氣 晴天。

出社 鳥越・谷・筒井・フデ・チヨ。

雜記 古藤・岡山、諸品械ヲ持チ、馬鹿頭ヲ牽キ本社ヘ午后一時ヨリ至ル。午后一時迄ハ、馬ノ鞋造リ及ビ荷拵ヘ。

△林策次郎氏、米売金收入ノ為メ来場アリタリ。時ニ午

農場 俵拵ヘ及ビ肥料米渡シ、谷・筒井・鳥越。

拾種心持・粋拵及ビ摺立、女二人。

夜業、俵拵、筒井・谷。米搗、女二人。

十二月卅一日 日曜、天氣 曇天。

出社 鳥越・谷・筒井・フデ・チヨ。

雜記 午后五時半本社ヨリ林策次郎氏、社長ノ書ヲ持チ、金受取ノ為メ來場アリ。依テ鳥越ハ談判ノ為メ夜業ナシ。

△午前八時ヨリ鳥越米売ノ為メ加布里村大字牧迄行、前ヨリ残金ト合三十九円ヲ持チ林氏ト同道、后一時ヨリ本社

行、同夜帰ラズ。▽

農場 積肥施、谷・筒井・フデ・チヨ四人ニ門ノ前・片山崎ヘ

施ス。

賄、チヨ。

十二月卅一日 月曜、天氣 晴天。

出社 谷・筒井・チヨ。

雜記 鳥越帰ラズ。フデ帰宅ヲ命ズ。

農場 午前積肥施、右三人。肥汲ミ及ビ俵掩、后三人。夜、餅

搗三人。賄、チヨ。

△廿八年▽壱月一日 月曜、天氣 晴天。

出社 谷・筒井・チヨ。

新年ニ付祝日。

一月一日 天氣 曇、火曜。

出社 谷・筒井・チヨ。

雜記 鳥越社用ニテ本社行ノ処、午后二時帰ル。夫ヨリ米及ビ

品械壳払ノ為メ、本区ヨリ加布里村ニ至リ、午后八時帰
ル。

農場 水肥施、午后二時迄、谷・筒井。

積肥施、同 迄、チヨ。

同 辛子田地掠、午后二時ヨリ右三人。

賄、チヨ。

ル。

一月五日 金曜、天氣 曇天。

出社 谷・筒井・鳥越。

雜記 鳥越帰宅ノ処、午后八時帰ル。

農場 谷・筒井、午前本区坐石迄大根運ビ。

后席・カマギ其他一切片付事。

一月三日 水曜、天氣 曇天。

出社 谷・筒井・鳥越・チヨ。

雜記 鳥越、庶務整理及ビ米壳・品械物壳ノ為終日。

農場 積肥施、谷・筒井・チヨ、門ノ前・有富分。

賄、チヨ。

一月四日 木曜、天氣 曇天。

出社 谷・筒井・鳥越。

雜記 チヨ帰宅ヲ命ス。同給料ヲ渡ス。

農場 鳥越、午后三時迄諸壳立ニ付、彼此談判、午后三時ヨリ

私用ニテ帰宅。

農場 谷・筒井、午前ハ諸品械取片付、後本区迄荷牽輪ニテ大

根壳リニ運ブ。

一月六日 土曜、天氣 曇天。

出社 谷・筒井・鳥越。

雜記 烏越、諸品壳捌ノ為メ午前十一時迄係ル。

農場 門口辛子植及ビ穢肥施シ、谷・筒井、午前十一時ヨリ鳥

越

一月七日

天氣 晴天。

出社 谷・筒井・鳥越。

雜記

農場
三人共、本区字瀬戸口、前七時ヨリ荷車牽輔ニ積肥ヲ積

ミ至り、同施及ビ水肥施、終テ大字頬戸分積肥施、終テ

門口水肥施

勤怠表

○○七十六
○○八十五
○○九十四
○○廿十三
○○廿十二
○五分廿二十一
○休廿三十一
○○廿四十九
休○廿五十八
○○廿六七
○○廿七六
○○廿八五
○○廿九四
○○卅三
○○卅二
○一
鳥越

一月八日 一月曜、天氣 晴天。

出社 谷・筒井・鳥越。

雜記 鳥越・谷 廉務計算。筒井信品氏シ及ビ雜務。

一月九日
午前
火曜

天氣 午前晴 午后一時三里雨降ル

雜記 第三農場 都合ニ拵リ本年麦播付迄ニ取片付ニ付
閉場

同
シ
谷・筒井ハ荷物ヲ荷車壹輶ニ載セ
正午出發
志摩

同
君道：「此後凡時不復『到家』，馬越少，月二日出。」

功業士第三農易開易。

明治廿八年一月九日。

廿八年一月勤怠表

四、添付資料

① 「勸農社第三農場金収入支出仮簿」集計表（明治二十七年十一月二十九日以降）
〔収入の部〕

月	日	金額〔円〕	項	目	氏名
[M29]	十一・二十九	六・三三九	前金残	井手辰次郎	
[M28]	十二・三	二・六七〇	米一俵	西原熊吉	
同 同 同	十二・三	○・三九六	賄一八度分	岡一作	
一	十二・三	○・〇〇〇	米一〇俵壳立代	加布里村	
五 日 日 日 日	十二・三	二八・六四〇	米一三俵壳約定ニテ手附金	藤瀬次平	
一	二十七	二一・五〇〇	二十三日約定ノ米一三俵ノ内九俵上米、四俵中米、		
一	二七	一八・二〇〇	中米一俵ニ付二円五六錢、上米一俵ニ付二円六〇		
一	二七	二六・九八三	錢ニテ壳払残金		
一	二七	一・一五〇	牛一頭壳立代		
一	二七	一・六九〇	米七俵代壳分		
一	二七	一・八九五	スグリ藁五〇束		
○ ○ 九〇	二七	一・九八三	大豆三斗五升一合、小豆八升六合、黒豆四升		
大根上八六〇本、一本ニ付八毛宛、下七二〇本、	二七	一・九八三	影米二斗二升、粉米一斗八升		
一本ニ付六毛宛	二七	一・九八三	荒穀三升		
長糸製糸合資会社	同 同 同	人 人 人	青木清助 赤坂坂巻円介 加布里藤瀬次平	人 人 人	

一・一九
三三・四七〇

一・二十
六・〇三五

穀及ビ諸品械壳立代
米ニ俵一斗一升五合代

リ別紙諸品械壳立帳ニア
長糸小学教員 松崎、井手鶴太郎松
井手 鶴太郎
鳥越猿吉 大字飯原 波多江惣十

合 同 同 同
計 日 日 日 日
一八八・
一一三
二・四三九
二・二二五
○・八六一
一一三

内訳〔田〕

一一六・五一三 米壳代金

一一一・五〇〇 牛壳代金

一・六九〇 豆壳代金

薬・諸品械壳代金

三四・六二〇 大根壳代金

一・一二〇 番小作譲り代

五・〇六〇 賄費

○・八六一 塩壳立

六・三三九 井手ヨリ引受

右、外ニ収入金未済之分

一・九五四 生徒本國・日並・中村三人食費

勸農社第三農場の運営（西村 領）

明治二十八年一月廿一日

同収入金未済之分 十月十五日ヨリ同十九日迄賄費

○・三七五 井手辰次郎

未済ノ分

ダニ・三三九

月	日	金額[円]	項目	氏名
十一	二十九	四・二〇〇	蒲團二枚	福岡簾子町 小西茂平
十一	三十	四・二三三	界紙二状、半紙二状、筆一本、上蠟燭一斤	太宰府 大和屋
十二	三十一	一・七二〇	大麦四斗、種子用	本区 和田議作
十二	三十二	一・〇一〇	賄用酢三合	初瀬 深江 善六
十二	三十三	一・〇一〇	賄用鰯魚一尾	福原 すゑ
二十一	三十四	一・〇七〇	賄用カナギ一升	人
二十二	三十五	一・二〇〇	鰯魚節四本代、右從前借受ノ分、賄用也	姪浜 平四郎
二十二	三十六	一・五七〇	醤油膏一斤、一〇〇斤ニ付三〇錢、外俵代	壳捌人 三島卯右衛門
二十二	三十七	一・五八〇	洋燈ホヤニツ、同ジミニ筋、同修繕、先日分合セ	周船寺村 富永長三郎
二十二	三十八	一・九〇五	テ	加布里川崎甚作
二十二	三十九	一・〇〇〇	井手借入金返却、利子ハ無シ	井手 鶴太郎
二十二	四十	一・六五〇	平鍬二挺、唐鍬二挺	井手 重藏
二十二	四十一	一・一八〇	ドウガネ	同 人
二十二	四十二	一・一三〇	社用摺付木一□	大和屋
二十二	四十三	一・一四〇	四〇錢鍬平、マニ二挺、二五錢ワラスグリ三ツ、	本区 荒物屋
二十二	四十四	一・一五〇	車用辛子油	八反田 大和屋
二十二	四十五	一・一八〇	賄用付木七把	西 辰次郎
二十二	四十六	一・一九〇	界紙一状	深江 福原する
二十二	四十七	一・一九〇	賄用茶	
二十二	四十八	一・一九〇	賄用鰯魚一尾	
二十三	四十九	一・一九〇		
二十三	五十	一・一九〇		
二十三	五十一	一・一九〇		
二十三	五十二	一・一九〇		
二十三	五十三	一・一九〇		

[M28]

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

井手受持ノ時、小麦代金払残り
木枕五ツ、汁椀一五代、右ハ三農場入用ノ品穢、
浦志瀧任節貢込ミ、代金未済ノモノナリ
郵便端書三枚、谷飛佐吉・柴田松次郎帰宅ニ付、
出場ノ催促及ビ志瀧郡吉田、平野チヨ実家送リ
牛壳立代、本社ヘ納ノ分
一斗桶二ツ、代四〇錢、飯桶二ツ、代六六錢、右
清志ノ時製造ノ分
僕アミ質ノ内
農場員手ニ慰勞ノ為メ銘録、黒砂糖半斤用
表給三俵代、井手受持ノ分
クンラ一斤、藉用
現米壳立金、本社納ノ分
志摩郡櫛奈イキ父及ビ闇四郎ヘ送リ端書一枚、本
社來季雇女ノ件
外俵百俵アミ質
賄用かつを魚一尾
石炭油五合
外俵二七俵、内俵一二三俵、アミ質ノ残リ
福岡日々新聞代
賄用、一月二日醤油一升五合、本日同一升五合
鞍骨代、但シ、借受鞍骨修繕料トシテ
賄用、薪四把
井手受持ノ時、竹代

伊予桜井	青木 留吉
本社事務所ニテ	社長
大字東 慶原次六	
八反田 大和屋	
青木 留吉	
八反田 大和屋	
大字裏野 湯口惣五郎	
深江 すゑ	
事務所ニテ 社長	
大 和 屋	
深江 すゑ	
志摩郡吉田	
平 野 孝 三	
青木 留吉	
青木 審次郎	
大字本綿敏次郎	
三 島 卵右衛門	
八反田 初瀬屋	
青木 留吉	
大 塚 八十吉	
無津呂 留吉	

一五・〇〇〇

借金返済

五・五八四

肥料買受料

〇・六〇〇

井手払残り、小麦代金

一・五〇〇

馬糞麦糠三俵

一・七二〇

種子大麦及ビ馬糞大麦

二・六九二

消耗費

②「金領収証諸品械売払之分」一覽表（明治二十八年一月）

月	日	金額[円]	品名	売先
同	同	〇・四五〇	三枚鍋	青六
同	同	二・七〇〇	一ツ・二枚鍋	留吉
同	同	〇・二〇〇	唐鐵	次平
同	同	三・九〇〇	二挺	人
同	同	一・五〇〇	駄桶	人
同	同	四〇〇	蒲団	儀三郎
同	同	四〇〇	肥手桶	人
同	同	四〇〇	肥手桶	人
同	同	一〇〇	藁スグリ	重八
同	同	一〇〇	肥柄杓	利七郎
同	同	一〇〇	馬鞍下ビラ	吉
小	桶	一荷	小飯桶	人
肥	手桶	一ツ	肥手桶	人
小	飯桶	一ツ	馬鞍下ビラ	人
肥	手桶	一荷	藁スグリ	人
同	青	波多江	古川	青木
人	木	木清助	木利七郎	木利七郎
人	人	人百藏	人留吉	人留吉

右鳥越猿吉受持中差引残金五円弐拾壱錢、同年一月廿二日受取候事。

明治二十八年一月廿一日

社長 林 遠里印

同一同同同同同同同同同一同同同同同同同

日八日日日日日日日日日七日日日日日日日

味噌桶	コマゲタ	一 個
バンコ	マンリキ	一 個
糲揮ヒ	ユマゲタ	二 個
芥	ナタ	一個
塙	一 個	
瀬戸分蘖	瀬戸分蘖	二四〇把
肥桶	漬物桶	四ツ・馬盥
米通シ	一 ツ	
肥桶	二七〇把	
糲	五五〇把	
イカシ鍋	一枚	
肥桶	三本	
肥ヒシヤク	一本	
糲	三五〇把	
秋大豆グズ	三五〇把	
斗筈	五 ツ	
中皿	三個	
水手桶	一 荷	

勸農社第二農場の運営（西村卓）

③ 「勸農社會計予算」

〔表紙〕

勸農社會計予算	
〔縦二四・〇幅、横一六・〇幅〕	
小使	二人
評議委員	八人
合計	貳百九拾參円四拾錢

諸費見積予算

作女	二人	八拾七円貳拾錢
小使	一人	四拾參円
評議委員	八人	四拾參円貳拾錢
合計	貳百九拾參円四拾錢	
筆紙墨	貳拾円	
炭	參拾円	
薪	四拾円	
四拾円	拾五円	
八拾円	拾五円	
拾五円	拾五円	
八拾円	拾五円	
印刷費	拾五円	
郵便電信料	拾五円	
農具修覆料	拾五円	
肥料	百円	
家屋修繕料并雜費	百武拾伍円	
馬(飼料)	百円	
旅費	參拾參円六拾錢	
合計	七百七拾參円六拾錢	
支出總計	參百円	
金毫千五百貳拾參円		
耕作掛	四人	
耕作掛	四百五拾六円	
百貳拾円		

収入之部

千〇五拾円

教師七拾人維持金

百五拾円

社費一統分（但シ派遣教師ヲ除ク）

参百六拾円

作得米百參拾五俵代金

百六拾円

麦百俵代金

七百円

負債消却済迄派遣教師ヨリ一時取替金

合計武千四百武拾円

収入額計

金武千四百武拾円

収入金武千四百武拾円ヨリ

支出金毫千五百武拾參円引去リ

残而

金八百九拾七円

此内六百五拾円宛年々借用金元利ニ拵入レ予算

此外ニ

名耆社員ノ義捐アル可シ。